

No.61 contents

- 1 春季二科展開催 新理事挨拶
- 2 絵画[総評]魅力ある春季二科展
春季二科賞を受賞して
- 3 絵画・春季展選抜作品 自作自評
- 7 彫刻[総評]春季展選抜作品 自作自評
- 9 春季展に寄せて デザイン部・写真部
出品者リスト
- 10 訃報 名誉理事長 織田廣喜氏
- 14 訃報 97回展日程表 巡回展
- 15 法人移行認定について 会員総会 役員リスト
- 16 セレクション展 吉野理事芸術院賞受賞
復興支援計画 短信 事務局から 編集後記



春季

発行人：田中 良 発行：公益社団法人 二科会
<http://www.nika.or.jp/> TEL：03-3354-6646



春季二科展 開催



新理事長挨拶

田中良

この度は日本を代表する公衆団体である伝統の二科会の代表理事の重責を仰せつかり身の引き締まる思いでおります。思えば私は昭和二十八年第三十八回二科展に初入選して以来約六十年の間二科会を芸術追求の場とし会の歴史と共に歩んで参りました。二科会というと世間的には華やかなイメージがありますが、私は戦争も体験し、厳しい大自然の中で過ごしたこともあり、自然に対する畏敬の念と人間の深淵を感じさせる風景画を描きたいという気持ちが強く、時代の潮流に右顧左眄することなく静かに己の道を追求めて参りました。

二科会はまもなく百周年を迎えます。会の皆様は力を合わせて展示や審査等改革し良い方向に向けて努力をして下さっています。公益法人化され益々二科会は芸術活動を通して社会に貢献していかねばなりません。私も理事長として少しでもお役に立てたらと思っております。会の運営に尽力するとともに、芸術を志すものは全て個に帰らなければなりません。時代や価値観は変わっても芸術を通して自己表現する心は失われることはありません。作品を通して次世代にその心をお伝えしていくのも私の役目と思っております。何事も至りませんが、前理事長である織田先生の功績に感謝するとともに、会員の皆様、関係者の皆様のお力添えをお願いし新任の御挨拶とさせていただきます。

総評
[絵画]

魅力ある春季二科展

理事 香川 猛

桜花爛漫の好季にリ
ニューアルオープンした東
京都美術館で待望の春季二
科展を開催した。四月一日
には社団法人二科会が公益
社団法人二科会へと内閣府
から認定されたことは二科
会関係者にとって二重の喜
びである。

四月十七日の初日は午後
二時からのオープンにもか
かわらず、百人近くの行列
ができ、半日で千人以上の
入場者があり、伝統ある二
科展を象徴する幸先の良い
スタートができた。

絵画における作品展示の
コンセプトとして、今回は
若手作家の奨励と育成を掲
げ、第一室にはシード作家
の大作を並べ、第六室から
第九室には本展受賞者の作
品を展示し、将来を期待さ
れる若手作家を前面に押し
出した。また、新たに春季
二科賞を設け、千葉県の
シード作家加藤ひとみさん
が受賞された。

その甲斐あって、新しい
会場に相応しい新鮮で見応
えのある作品展示ができた。
入場者も日毎に増加し、

全期間を通じて、九千人に
達した。賑やかで稔ある春
季二科展となった。

また、初日にはシード作
家によるギャラリートーク
が開催された。作品制作の
意図や描画技法、制作の苦
労話などが話され、入場者
から新鮮で的確な質疑応答
がなされた。また作品編集
委員の尽力により素晴らしい
作品集ができ、会場入口
で販売された。新しい展示
方法を工夫し、展示効果を
上げること、ギャラリート
ークや作品集、二科
ニュースなどの広報活動を
活発にすることは展覧会を
盛り上げる条件と云える。
これ等の総合的な結び付き
と会員諸氏の努力と協力で
より、魅力ある春季二科展
が開催できたと思う。



リニューアルされた都美術館



加藤ひとみ 刻-窓から F130

春季二科賞を受賞して

加藤ひとみ

この度の春季二科展では
大作シードとして初めて
一三〇号に挑戦させて頂き
ました。ここ数年、「刻シ
リーズ」と銘打ってモノ
トーンの木々の陰影に魅せ
られ描き続けてきました。
その集大成とも言える今
回の作品が、初めて設けら
れた「春季二科賞」を受賞
させて頂き身に余る光栄で

す。本当に有難うございま
した。

会場へ向かう電車の中で
受賞を聞き、着いた時が最
後のギャラリートークにぎ
りぎりセーフ。何か夢のよ
うな一日でした。

キャンバスに向かっであ
まり難しく考えず自然体で
描きたい、また余計なもの
を省略し、心の安らぎ、静
かな刻の表現ができればと
この受賞を励みに日々精進
していきたいと思います。



会場指導風景



受賞式の加藤ひとみさん

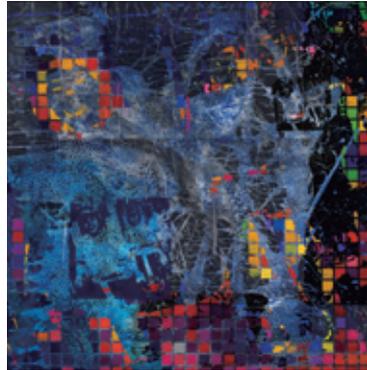


ギャラリートーク

春季展選抜作品 自作自評



餅原 宣久 時感12-V F100



山口 博司 ストリームV S80



北村 美佳 街 F100



内田 詠子 ミュウ、ミュウ F100



竹淵 直美 現 F100

街

北村 美佳

絵を描くこと＝絵を動かすこと。ここしばらくは、そんな仕事が続いています。でも、それだけではなかなか完成に向かってゆかず、逆に後戻りすることの方が多かったです。そんな中で、ドローイングって何だろう？私の線って何だろう？それは意識的にうまろう？それは無意識につくり出すもの？試行錯誤をくり返しながら、自分自身に問い続けています。いつか、ドキドキするような線に出逢えることを信じて。

ストリームV

山口 博司

都美術館で自分の作品と再会してがっかりした。新たな素材、技法に振り回され、課題ばかりが見つかった。この恥ずかしさを忘れないために多くの時間を作品の前で過ごした。後悔ではなく反省をして、見つけた課題を一つずつ確実に克服して、本展に望みたい。

時感12・V

餅原 宣久

画面に絵具をのせる（つまりは「描く」という作業により、画面上に長い時を

経た実に様々な「もの」たちが亜麻仁油の力を借りて重ねられていくことを今更ながら実感しています。そんな「もの」たちの力を借り、普遍性のある画面を目指しますが、今回の作品ではあと一仕事が必要であったように感じています。

現

竹淵 直美

今回の作品では窓からの光が床面に当たっている部分を水面に見立てて、そこに写っているもう一人の自分としての影を見つめている、というシーンを描きました。自分では納得のいかない部分も多いので、これからも精進していきたいと思っています。

ミュウ、ミュウ

内田 詠子

何となく画面を観て猫の持つ雰囲気を感じられたらと思いつつ常にキャンバスと向い合っています。クールさあり、あどけない可愛さあり、時には怪物のような風貌あり、これらが色々入り交った面白さが表現出来たらと願っています。書く事を楽しんでいきます。ややもすると形にこだわり過ぎてしまうのが私のこれからの課題です。

春季展選抜作品 自作自評



田村 一男 建群 F130



坊中 静六 BABEL F130



上原 さつき 天蚕 F130



小林 豊弘 ジャズ・ミュージシャン'12 F100



茶谷 弥宏 対話 F100



井上 知枝 三角山のこいのぼりたち F130

天蚕

上原 さつき

天蚕、山繭の描き方研究を始めて二年。繭の中はどうなっているのか、山中の人知れぬ茂みの中や手の届かぬ高さの所に潜む虫が、秘かに繭を作り、サナギに成長して入る殻の中は摩訶不思議。どうしてあれだけの淡い光沢を出す織物に变身出来るのだろうか。

絵画で表現するには試行錯誤を繰り返し研鑽を深めねばならない。今後さらに努力してゆきたいです。

普通の絵

坊中 静六

最近、空を描きたいと思い、白い雲を中心とした構想で、出来上がったのがこの作品です。白い雲をただの背景として描くのではなく、この雲にも言葉を持たせたかった。雲だけ描いたのでは何か物足りず、海辺と男の顔を描いたが、完成してみると普通の絵になってしまいました。

私は、私の絵を観る人が楽しく対話する、そんな絵を描きたいと思っています。

建群

田村 一男

永い間、色々な建物を画面構成しながら描き続けてきました。

落ちついた色調、構図の

空間から旅情や息づかいを感じ、言葉を超えるリズム、メロデーが流れ出てくるようにとの思いを表現し、心あたたまる作品づくりに今後も精進していきたいと思っています。

三角山のこいのぼりたち

井上 知枝

心を自由に、心を解放するような、おらかな絵を描きたいと思いますが、表現も未熟で、なかなか描けません。さがしています…

私の絵…

試行錯誤の連続で、歩みは遅いですが、これからも制作に励みたいと思います。

対話

茶谷 弥宏

人物と背景との構成がしっくりいかず思い切った人物を小さくしました。

「対話」というよりは「走る」がメインになったように思います。

そのため心象風景のような効果が生まれ、細部の表現には物足りない部分も残るが、意外と変化に富んだ作品に仕上がりました。

これからさらに精進していきます。

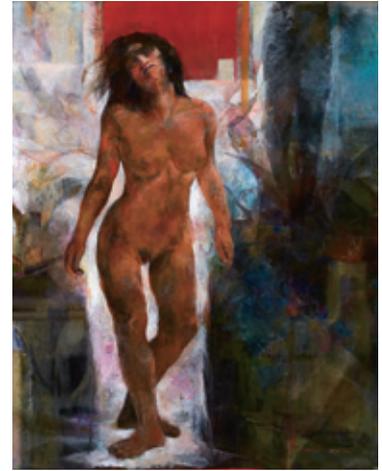
春季展選抜作品 自作自評



瀬野 道子 予感 F100



須田 美紀子 道しるべ F100



織田 清子 生る F100



長谷川 昭三 復活 F100



水野 興三 風の街 F100

予感 瀬野 道子
 僕は、ジャズに耳を傾け、聴いたままを、絵にかいている。音楽と絵は毎日の暮らしの欠かせない一部になっている。絵のおかげで、つらい時もなくとか気持ちもちこたえてやってきた。音楽を聴いた時の高まりを、絵にしたいという思いから、この絵が生まれた。

生る 織田 清子
 描いては消し描いては消し思いが込められず苦労しました。ドーンと真正面から正攻法でぶつかり情念をたつぶりぬりこめた絵画題のように『清子ちゃんと生きているの』と自問しつつ描き続けたいと思います。私の一本道前進あるのみです。

道しるべ 須田 美紀子
 昨年、被災地支援活動をして頂き誠にありがとうございました。とても素晴らしい感動いたしました。一マイクロシーベルト以上あったアトリエの放射線量も少し下がりました。今後もこの震災で感じた事を胸に秘め、力強い表現方法を模索しながら努力し続けていきたいと思っております。

復活 長谷川 昭三
 人と自然の調和をテーマにした現代万華鏡シリーズを描き続けています。人はこれまで地震や津波などどんな自然災害にも負けず、自然との調和を保ちながら発展してきました。これからも夢と希望を忘れず、新しい社会を共に築いて行こうという思いを込めて描きました。

風の街 水野 興三
 春夏秋冬、季節の事生れ育ったところの事近くにあるもの事身の周りの事こと こと 事
 そらの 雲の流れ
 変りゆくもの
 風の街

予感 瀬野 道子
 長年、青を基調とした絵を描いてた。神秘的、非物質的で抽象的な、青、群青、碧：今回の作品は、描くという孤独な時間の中で、心にかの予感を感じ、青色に浸透していく、それを表現した。今後も自分の感性を軸として、青の世界を展開し、追究していきたいと思う。

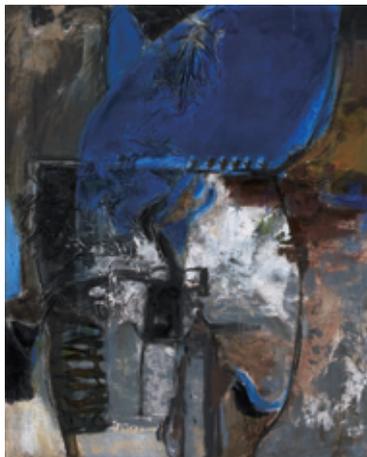
春季展選抜作品 自作自評



蒲田 宏 菜の花の咲く頃 F130



ナカムラ 延 想起 F100



佐藤 英行 愚か者 F100



山下 かじん 自画像 F100



町田 初恵 街 F100

想起

何を描こうか。まずは、パッチワークのように鮮やかな色の世界で遊ぶ。

薄い色に濃い色をのせ、また、その反対を。それらを何回となく繰り返す。

強弱の画面作り、否定と妥協との戦い。やがて何かが生まれ。不安定な線がリズムカルに舞う、その瞬間に挑みたい。

菜の花の咲く頃

蒲田 宏

私たちの記憶には、すぐに廃れ消え去るものと、記憶の中でいろいろな時と色彩とがない交ぜになって、現実には自分でもどこと特定出来ないのに、強く繰り返す蘇がえつて来るものがある。暗うつな冬が去るとブリ

テン島のいわゆるホワイト・クリフ(白い断崖)の海岸

線には、菜の花の丘陵が見渡す限り延々と続く春になる。そのクリフの石灰石が石盤のチョークとしても使われたことから「チョーク」も呼ばれるその白さ。春の移ろいやすい雲と光に映える黄色の帯。冬からの解放の記憶はそれを空から眺めている気分として強く私の中に残っている。

街

町田 初恵

過ぎし日の心痛む震災、しかし時の流れは止められず、人々は現実を忘れて未来に向って行ってしまう。とり残された心が街の中に安らぎを求める…観念的な表現の難かしさを知りました。

自画像

山下かじん

線を創るのがおもしろい。出来るだけ作品にしないよう心掛けたが、構成を意識した瞬間つまらなくなつた。素材と行為を吟味し繰り返して実験しているが、最初と最後はブレイヤーの唯一の醍醐味を大事にしたい。

そんな混沌さと行為を自画像としました。

愚か者

佐藤 英行

愚かな絵描きが仙人に尋ねました、絵はどうしたら上手くなるかと尋ねると仙人は柿の種を一粒くれて実がなつたら又来なさい、八年が過ぎ仙人を訪ね、まだ絵が上手くなりませんがと云うとまた柿の種を一粒くれました。八年たつて仙人を訪ねると柿を食べたかと聞かれ洪かったと答えると柿も絵も熟すのは年月がかかる…今の心境かな

総評
[彫刻]

和(なごみ)の空間

理事 登坂 秀雄

リニューアルのために閉館していた上野の東京都美術館において二年振りに春季二科展が開催されました。

会員・会友と昨年度の本展受賞者合わせて四十八点の作品が展示され、多くの来場者を迎えることが出来ました。

じっくりと作品を見入り、語り合う姿を見て、春季展そのものは成功であったと思います。

小山由寿彫刻代表の遺作「波の木」も展示されました。春季展前にして亡くなられ、金属彫刻を主に制作されて

感じ、常に時代を問う制作姿勢には、多くを教えられ導かれました。自己と彫刻の一体性の確立を求めて精進するためにも、留めておきたい二人の先達の記憶を述べさせていただきました。

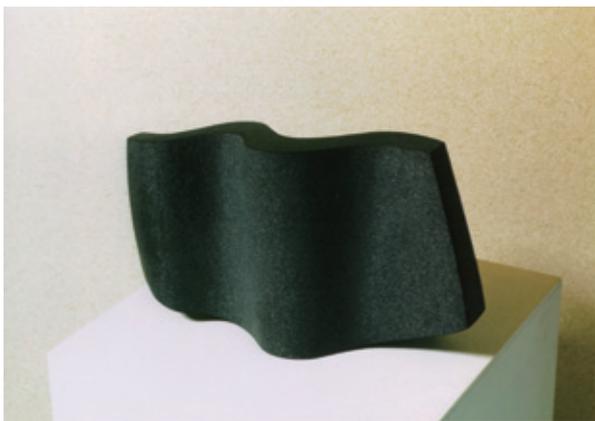
四月十七日、搬入・展示の初日には、春の陽気に誘われたかのように出品者には笑顔が溢れ、展示企画委員の指示に従い穏やかな雰囲気の中でスムーズに展示会場がつくられていきました。東京都美術館の会場は平面作品用にしつらえたとしか思えない壁・床・天井と引きの少ないスペースで、二科彫刻部の多様な表現には、多くの制約となります。本来、彫刻展示には作品を取り巻く動的空間が望まれますが、ここでは、ほとんどの作品を台座に乗せ、壁面にそって整然と静的に並べざるを得ませんでした。サロン風の展示会場になりましたが、多くの来場者が

じつくりと作品を見入り、語り合う姿を見て、春季展そのものは成功であったと思います。小山由寿彫刻代表の遺作「波の木」も展示されました。春季展前にして亡くなられ、金属彫刻を主に制作されてこられた先生が木彫作品を制作し、新たな創造世界を夢見ていたことが感じられ、とても淋しく残念なことを思います。さらに、昨年末には、二科彫刻部をリードしてきた倉澤實先生が逝かれました。私自身は、二科に出品して四十年ほど、出品当初より倉澤先生の彫刻には哲学的な背景を濃く



彫刻会場

春季展選抜作品 自作自評



戸部 晴朗 風に潜むもの



秋山 隆 夢の蓄積

夢の蓄積

秋山 隆

将来への夢を想い描きながらトランクの上に寝そべる女性を制作した。トランクの中には、これまで思いを馳せたいくつもの夢が詰まっている。夢とは人が生きていく為の起動力であり、叶わなかったとしてもまた新たな夢を蓄積していく。制作もまた理想とする表現に近づけていく夢の蓄積であると考えている。

風に潜むもの

戸部 晴朗

吹き抜けていった風に目を凝らす
それは、徐々に形になって現れた
草木を揺らし髪をなびかせ遊んでいる
いなくなつては現れ
いたずらを繰り返している
みたいだ

春季展選抜作品 自作自評



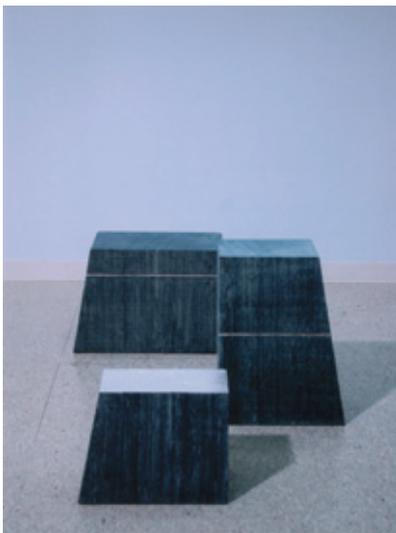
高坂 静香 ワールズエンド、グランドフィナーレ



吉野 ヨシ子 春の詩



本多 紀朗 起



山田 美樹 ことわり



土屋 賢次 対峙

起

本多 紀朗

本作品は、麒麟の力強く、スピード感がある首をモチーフとして取り上げました。寝ていた麒麟が目覚まし、起き上がる姿を表現しています。昨年度の受賞を踏まえ、自分自身、何事からも起き上がり挑戦してつくることに情熱を持ち、突き進む制作を常に心掛けていた事から、題目を『起』としました。

春の詩

吉野 ヨシ子

厳しい冬を乗り越えれば、春が必ずやつてきます。鉄の丸棒をたいて屈せない厳しさを乗り越えた気持ちを表し、湧き上がる大きな希望は、モチーフとしている球体です。更に、下に目を向けると、少し葉の形をした柱から伸び上がる鏡面の筋は都市空間です。春、心も一歩前進できる私自身でありたいと思います。

ワールズエンド、グランドフィナーレ

高坂 静香

物静かな老夫婦のような佇まいの作品になればと思い制作しました。様々な意味で至らない点ばかり目立ってしまったですが、次回作への課題としたいです。

対峙

土屋 賢次

「形の出現と消滅」記憶にない非対象の形を暗中模索に制作しております。この形は制作途中の材料を縦方向に切断方向転換して横方向に接合して生じた左右が存在してバランスがとれる形です。縦方向で一年、横方向で十日程度。搬出の時會員の先生に安易に制作していることについて×。でも大変勉強になりました。

ことわり

山田 美樹

垂平と垂直そして垂平線。この世の中にあることわりの中で、どれだけのものが変わらぬにそこにあり続けられるのだろうか。私は、変わらずにそこに在り続けるものを見つけた。そして、変わりゆくものを愛しくこの目で見つめ続けたいと思うのだ。

春季展選抜出品者(彫刻)

- 秋山 隆(広島)
- 戸部 晴朗(埼玉)
- 本多 紀朗(大阪)
- 吉野 ヨシ子(千葉)
- 高坂 静香(山形)
- 土屋 賢次(群馬)
- 山田 美樹(山形)

春季二科展を終えて。

デザイン部代表 今村昭秀

リニューアルした東京都美術館での春季展は、その展示会場を楽しみにしていたのですが、壁面が白くなり、以前よりきれいになってる他は、それほど変わった新しくなったという印象はありませんでした。ただ同じフロアで絵画、彫刻、デザイン部の作品が鑑賞できるようになったのは、一般入場者の方には鑑賞しやすくなったようでした。

ま、それでもライブやコンサートへ行くのは時間と空間を豊かに生きる「心の満足」「個の充実」には、直接オリジナルに触れることにあるからで、誰もがなんとなく感じていたコトを「可視化」することがデザイン部であるとするれば、デザイン部ができるような視点を示すことができるかどうかが問われている気がしました。

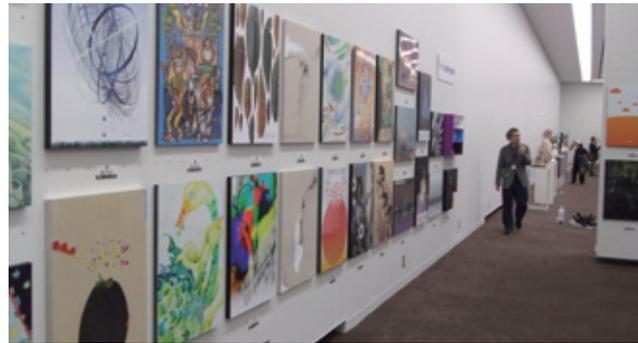
春季展への参加で、デザイン部がこれからの在り方、方向性、意義などを改めて問い直すべく、反省の機会になりました。まいましたが、春季展に参加したからこそ見えてくるモノやコトがあり、それらを本展へフィードバックしたいと思います。

春季二科展に寄せて

一般社団法人二科会写真部事務局長 片岡順一

このたびの春季二科展の開催、そして公益社団法人への移行認定、誠にありがとうございます。

写真部では一般公募作品の受け付けや審査を行うう繁忙な時期にあたり、残念ながら春季二科展への参加が叶いませんでした。にもかかわらず、春季二科展のオープニングレセプションに招聘頂き、ここにあらためて御礼申し上げます。



デザイン会場

静寂な森の明るいレセプション会場、今年度から春季二科展に賞を設置されたお話を表彰を拝見し、和気藹々とした雰囲気の中にも、この展覧会に積極的

に取り組んでいらっしゃる皆さんの真摯な姿勢が感じられました。

展覧会場では精勤刻苦を積み凄烈な創造力に満ちた作品群に深く感銘を受けました。リニューアルされた東京都美術館は来観者に配慮した機能の充実が随処に見受けられ、まさに芸術の森にふさわしい春季二科展の新たなはじまりを感じました。

公益社団法人として、更に充実した芸術活動と共に、後進の育成を推進される趣旨に、私ども一般社団法人二科会写真部も賛同し、絵画・彫刻・デザイン・写真4部で開催する二科展に、従来にも増して協力体制を堅持し参画いたします。

最後になりましたが、彫刻部吉野毅先生の芸術院賞受賞に心より御祝い申し上げます。芸術の真骨頂を高くに世に知らしめた先生の作家活動に敬服いたしました。

春季展選抜出品者(絵画)

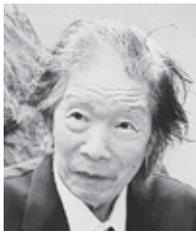
- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|------------|------------|------------|------------|-----------|------------|------------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-------------|------------|-----------|-----------|------------|-----------|-------------|-----------|-------------|-------------|-----------|-----------|-----------|
| 永田 治子(東京) | 北村 美佳(滋賀) | 瀬野 道子(京都) | 上原 さつき(神奈川) | 織田 清子(福島) | 坊中 静六(愛知) | 内田 詠子(愛知) | 加藤 ひとみ(千葉) | 田村 一男(岐阜) | 水野 興三(愛知) | 小林 豊弘(神奈川) | 須田 美紀子(福島) | 長谷川 昭三(兵庫) | 餅原 宣久(鹿児島) | 井上 知枝(滋賀) | 佐藤 英行(神奈川) | 茶谷 弥宏(新潟) | 町田 初恵(茨城) | ナカムラ 延(千葉) | 山下 かじん(長崎) | 池原 多恵子(富山) | 磯貝 文利(愛知) | 今泉 あかね(神奈川) | 浦上 光喜(熊本) | 太田 広信(富山) | 片岡 素子(東京) | 工藤 絵里子(埼玉) | 栗原 清道(愛媛) | 小林 直司(新潟) | 佐野 武夫(愛知) | 洪谷 良子(千葉) | すぎもと 和知(愛知) | 竹淵 直美(埼玉) | | |
| 田辺 幸子(新潟) | 遠山 由美(大阪) | 永井 勝(東京) | 中村 正江(岐阜) | 西村 眞紀(石川) | 根木 悟(京都) | 服部 幸雄(群馬) | 古谷 和子(神奈川) | 森 千恵(愛知) | 安本 弘恵(愛知) | 高見 愛(熊本) | 西 夏希(熊本) | 西 本誠(長崎) | 吉井 愛(大阪) | 中村 紘子(東京) | 津田 佐千子(石川) | 大堀 幸子(神奈川) | 山下 泰弘(千葉) | 中野 忠士(熊本) | 堀谷 莉恵(熊本) | 音 辻尊徳(長崎) | 岩田 一男(山口) | 鳥谷 啓子(兵庫) | 宇都木 裕子(滋賀) | 新川 久子(岐阜) | 蒲田 宏(神奈川) | 山口 博司(長崎) | 岡本 礼子(広島) | 山田 美代子(北海道) | 朝倉 由美(静岡) | 高谷 ひろ子(神奈川) | 石丸 節子(千葉) | 金子 久子(愛知) | 鈴木 郁代(岐阜) | 鈴木 郁代(岐阜) |

計 報

名誉理事長 織田 廣喜氏



第91回展出品作 ミュゼー六本木 F300 織田 廣喜



名誉理事長 織田 廣喜
平成二十四年五月三十日没 98歳
ご遺族 織田 きし男 (次男)

- 織田廣喜氏略歴
- 一九一四年 福岡県生
 - 一九四六年 第31回二科展絵画部 二科賞受賞
 - 一九五〇年 二科会絵画部会員推挙
 - 一九六八年 第53回二科展絵画部 内閣総理大臣賞受賞
 - 一九七一年 第56回二科展絵画部 青児賞受賞
 - 一九七九年 (社)二科会幹事就任
 - 一九八〇年 (社)二科会理事就任
 - 一九九五年 日本芸術院賞
 - 一九九五年 日本芸術院会員就任
 - 二〇〇六年 日本芸術院賞
 - 二〇一二年 (社)二科会理事就任
 - 二〇一二年 公益社団法人二科会 名誉理事長就任

追悼 織田廣喜先生

最近ご不調で心配しておりましたが、とうとうこの日がまいりました。

先生の想い出は、尽きるところありません。

先生のお仕事の素晴らしさについては、万人景仰するところで、そのことを離れて日頃敬愛する先生の、生き方とお人柄について二、三記す次第です。

「そんなことは、い、よ」と例の温顔で、そちらの世界から声をかけて頂いているような感じもします。

先生の戦後31回展の作品を見た時、足が釘づけとなりました。二科会でも衝撃的デビューだったようで、岡田謙三先生が「織田君 どんなどころで描いているの」とのことで、案内されたところが戦後の焼け跡の新橋付近の国鉄のガード下で、「こ、は水道が出ますので炊事もできます」。

そして、展覧会事務所に岡田先生と奥様に呼ばれ、岡田先生宅の一室を使いなさいとなり、面接試験に合格し「食事の心配もなく画を描くだけの、下界から天国に登ったようでした」とのこと。岡田先生が「ただ条件があるが、「岡田さんでよいのだから

決して先生と呼ばないよう

に」と言われたそうで、まさにこの師にしてこの弟子ありです。当時はまだ物騒な状況で、岡田先生ご夫妻が「織田君 泥棒に入られないように頼む」と外出され、織田先生は、玄關の上り縁に正座して家番されておられる。うち居眠りとなり、帰られたご夫妻がソーと傍を通って入られましてネ、失敗しました。

そして、岡田先生がアメリカに渡られることになり、誰か織田君を頼むとのことで、中原実先生が「庭に小さい建物があるので来なさい」と引継がれ、先生は次々と大作をものにしてこられました。何か恩返しをと、庭の樹木を手入れたところ、庭師から大事な枝を切りましたネ と云われイヤハヤこれも失敗でした。

二科の用で都心に出た折には、ご一緒丸の内線へ降り、先生は新宿で下車、私はそのまま、乗って行くのですが、何時も新宿のホームで電車が発車するまで見送って頂き、恐縮しておりました。

二科展も、先生のお作品があることで、会場も芳香に満ちており、「自分の作品は、どこでせうネ」といつも聞かれましたが、これからは誠に淋しい限です。

謙虚・清廉・高潔それが先生でした。

長い間ご薫陶を頂き、本当にありがたうございました。どうか安らかに、ゆつくりとおやすみ下さい。そして、我々を見守って下さい。瞑想と合掌

石附進



96回展 会場にて

御礼

名誉理事長 織田 廣喜

私は平成十八年に理事長職を就任し、六年間その重責を務めさせていただきました。その間、長年東京都美術館で開催していた二科展の会場を六本木国立新美術館に移しました。また本年の四月一日からは公益社団法人としてスタートする等二科の歴史の中でまさに変革の時期でありました。実行委員や執行部の皆さんが

力を合わせて改革に取り組んで下さった結晶と感謝しております。二科の歴史もあと三年で百周年、そして私も間もなく百歳になります。何か生涯二科会との深い縁を感じ、画家として「二科会の織田です。」と名乗れることを誇りに感じて生きてまいりました。感謝の気持ちでいっぱいです。私も高齢になり、一分でも多く絵筆を握らせていただきたいという気持ちから、人格篤実で人望厚く芸術家としても敬意を表している田中良氏に代表になっていただき、また後進の方々に会の将来を託したいと存じます。

在職中の皆様のご厚情に御礼申し上げますとともに、新体制の二科会や執行部の皆さんに変わらぬご支援をお願い申し上げます。ありがとうございました。

織田廣喜名誉理事長は、ご自身の百歳と二科100回展を目前にして、残念なことに、五月三十日に逝去されました。二科ニュースでは、ご存命中に、理事長の責務を退かれての、「御礼」とする原稿をお寄せいただいております。新理事長、理事、役員のご就任を見届けられて、会の皆さんに向けての最後のお言葉として、謹んでここに掲載させていただきますこととしました。

討 報

会員 阿部 盛有氏



第95回展出品作
復活の朝 (マリアお早よう!) F120
阿部 盛有

阿部盛有先生が96回二科展に不出品だったこと、腰痛に悩まれていたので心配していたところでした。

十一月初めにFAXが入り、二〇一一年九月十一日午前二時三十七分、千葉市にて「帰天」(享年八十一歳十一月)の報を拝受致しました。尚一九八三年、復活祭に「受洗」とそえてありました。

昭和四十四年に二科千葉支部展に参加され、横浜の学校に勤められてお忙し中、ジュニア部の賞状を一手に引き受けて学校名、氏名の揮毫をお願いして数年ご貢献を頂きました。その後家の都合で東京に

移住され、都美館の二科展の受賞者発表を78回より数年間ホテルに泊って夜中に制作して頂き三日目の朝一番に貼り出したことを思い出します。

先生の作品を画集で振り返って見ますと大変素直な子どものような純粹で清潔な心づかいが伺えます。これは神を信じ受洗されたことが根底に有るから明るく優しい表現になったのではないかと想像されます。

洋画家生活(六十二年余)一九八二年二科七十周年史編集委員壁画作家活動三十年余はモザイク壁画制作に尽力されました。幼稚園、小学校、公民館、法人会館、教会祭壇、駅舎、医院等、岩手、神奈川、東京、千葉に及びます。

先生には常に清潔で生真面に支部活動にも取り組まれ新年会等皆んなで肩を組み乾杯の音頭をとられた事が忘れられない。阿部盛有先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。 合掌 大隈 武夫

討 報

評議員 井坂 忠氏



第96回展出品作
文化遺産の風 F120
井坂 忠

井坂忠先生を偲んで

生ある者の必ず滅するは人の世の定めとはいいいながら、あまりにも突然のご逝去は、われわれにとりまして、大きな心の打撃であり、限らない悲しみであります。ご病床にお見舞いした時の先生は、きわめてお元気に50回二科茨城支部展の催しについて、楽しみに語られておりました。そのいかにも精気に満ちたご様子からは、とうていご急逝など想像もできませんでした。

先生は、二科会評議員を務める傍ら茨城支部長として、長年に亘り貢献されて来られました。その先生のお姿は、私どもの大きな柱

でした。今、先生の叱咤と激励を受けながら奔走した日々を追い、先生の時には厳しく、時には優しくかつた在りし日のお姿を思い出しております。

さらに先生は、「地域文化の向上につくしたい」という言葉を繰り返し口にされ、その実現のために常に陣頭に立ち、実によく動かされました。病院患者に少しでも明るい気持ちになってもらいたいという思いから、水戸医療センターに「アート・スポット・二科」を設けたり、支部展で眼の不自由な方たちにも、絵を肌で感じてもらうと「手で触ってみるアートコーナー」を実現されるなど、様々にご尽力されました。

われわれは今後とも、先生から受けた教訓を心に刻み、二科会や茨城支部の発展のために努力して行きたいと思っております。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。 鎌田 道夫



会員 阿部 盛有
平成二十三年九月十一日没 82歳
ご遺族 阿部珠比古(長男)

- 阿部盛有氏略歴
- 一九二九年 岩手県生
- 一九五八年 第43回二科展絵画部 初入選
- 一九七一年 第56回二科展絵画部 特選受賞
- 一九七三年 二科会絵画部 会友推挙
- 一九八一年 二科会絵画部 会員推挙
- 一九九七年 第82回二科展絵画部 会員努力賞受賞



会員 井坂 忠
平成二十四年一月二十日没 82歳
ご遺族 井坂郁子(妻)

- 井坂忠氏略歴
- 一九二九年 茨城県生
- 一九六一年 第46回二科展絵画部 特選受賞
- 一九六五年 二科会絵画部 会友推挙
- 一九六八年 第53回二科展絵画部 金賞受賞
- 一九七〇年 二科会絵画部 会員推挙
- 一九九五年 第80回二科展絵画部 会員賞受賞
- 一九九六年 (社)二科会評議員就任 茨城支部支部長

討 報

会員 藤田 新氏



第96回展出品作
水門 F130
藤田 新



会員 藤田 新
平成二十四年三月十三日没 76歳
ご遺族 藤田 弥生(妻)

藤田 新氏略歴
一九八六年 第71回二科展
上野の森美術館奨励賞受賞
一九八八年 二科会絵画部
会友推挙
二〇〇〇年 第85回二科展絵画部
会友賞受賞
二〇〇八年 二科会絵画部
会員推挙
二〇〇九年
二科会佐賀支部支部長

藤田さんは有田に生れ育ちで、子どもの頃より絵が大好きで西九州の絵のコンクール等で良い成績だったと聞いています。若くして胸を患い肺の摘出手術をされ、三十代で入院を繰り返し、四十才頃より病院で療養生活に入り病院長のご好意で病院の空き部屋が提供され油絵を始められ風景や花など描くようになった。入院中の仲間と絵の好きな人に経済的にも支援を受け恵まれた環境も生れ、その頃二科展に出品されていた福成先生の知遇を得られたようです。退院後家の飲食店を手伝

いながら二科展に出品されるようになり五十才で上野の森美術館賞を受賞され73回展で会友に推挙されました。藤田さんは独自の色彩と構成で積極的に研究を重ねるタイプで色彩の大きな流れと色彩に純粹なごりのないものを深く追求された。酒が好きで福岡の長谷川陽三先生と親交を深められ沢山のことを学ばれたようです。佐賀平野のクリークと水門、田園、美しい空気を徹底して積極的に追求し、自分の体調を考え無理をせず後輩の指導には大変熱心だったと聞いています。

毎日を大事に寡黙で制作に打ち込まれた日々だったと奥様も話されています。余りにも速い旅立ちで大変残念でならない。ご冥福を心よりお祈り申し上げます

大隈 武夫 合掌

討 報

参与 杉浦 正美氏



第96回展出品作
厄除祈願 F100
杉浦 正美



会員 杉浦 正美
平成二十四年五月二十五日没 86歳
ご遺族 長谷正子(長女)

杉浦 正美氏略歴
一九二六年 愛知県生 初入選
一九五二年 第37回二科展絵画部
一九六一年 第46回二科展絵画部
特選受賞
一九六三年 二科会絵画部
会友推挙
一九八〇年 二科会絵画部
会員推挙
一九八七年 第72回二科展絵画部
会員努力賞受賞
一九九六年 (社)二科会評議員就任
二〇〇八年 (社)二科会監事就任
二〇一二年 公益社団法人
二科会参与就任

杉浦正美先生を偲んで 公益社団法人二科会 第34回定時会員総会を終えて、その翌日杉浦先生に総会の報告をかね病院へ見舞に行って来ました。評議員の件その他についてお話ししました。杉浦先生は何度も何度も良かった、良かったと喜んで下さいました。その日の先生の顔色も良く声の張もあり、先生は大変お元気な様子で私は安心して帰りました。しかしその四日後に永眠さ

れ、私共の落胆は大変大きなものでした。思えば第40回二科展で先生と私の出合の始まりでした。そのころの二科展は初日の黒んぼおどりから始まり名古屋の報道関係、繁華街と杉浦先生(酋長)を先頭におどり、うねったものです杉浦先生の酋長は、まさに筋骨たくましく、威風どどうと貫禄を全身で表現され見事なものでした。絵画の世界でもグループのリーダーとしても見事に務めて下さいました。私達は心から感謝しお礼を申し上げます。有難うございました。

永井 忠雄



報 告

常務理事 小山 由寿氏



昇揚
小山 由寿

在がりましたが、残念ながら今は皆様鬼籍に入ってしまった。

小山先生が吉忠時代、マネキン制作をモデルの前にして二十五年にわたり手がけて来られた経験により、具象作品への鑑識眼もとても厳しいものをお持ちでした。晩年御自身の制作はジュラルミンを素材とした先生独特な抽象作品を二科展に発表を続けて来られました。

二科会常務理事、そして彫刻部代表でおられました小山由寿先生が三月十八日に急逝されました。

先生は京都市立芸術大学彫刻科を卒業され、吉忠マネキンに二十五年勤められ、二科展に出品を続けて来られました。四十七才で同社を退職され、以降彫刻一筋に制作、発表を続けて来られました。退社後、近隣の市町村よりモニユメントの制作依頼が相つき、制作に励まれました。

当時関西の二科会彫刻部には大阪に長谷川雅司、日高正法、松下隆治先生、そして京都には堀内正和、番匠宇司、小山由寿先生というそうそうたる先生方の存

報 告

参与 倉澤 實氏



第95回展出品作
残したかたち
倉澤 實

彫刻は、全て作者である氏の好きな形で構成されている事を示しながら、絶妙な造形とバランス感覚を評されたものです。氏の仕事は、形自体の追及から、極めて観念的なものまでをカバーします。形と立体性が常に表現の中心に位置し、全ては強烈な具象力を背景に展開されます。

三つ目は倉澤氏自身によるものです。氏は自分の仕事が常に新鮮でありたいと願っておられました。ある瞬間や制作者個人の範疇に終わるのではなく、時代を越えて常に瑞々しくありたいとの強く静かな思いでありました。

二〇一二年十二月二十一日、彫刻家倉澤實氏の時間は止まりました。同時に氏の彫刻も固定されました。以後彫刻たちは、氏に吹き込まれた生命力を頼りに時代と向き合う事になります。

「彫刻は死なない。」氏の仕事に触れる時、私は穏やかな激励と強い叱咤が含まれたメッセージを感じます。

倉澤實先生、暫くのお別れと致します。再会の時を楽しみにしております。ありがとうございました。先生とお会い出来た事を誇りに思います。

神田 每実



常務理事 小山 由寿
平成二十四年三月十八日没 79歳
ご遺族 小山 静陽(妻)

小山 由寿氏略歴

- 一九三二年 奈良県生
- 一九五四年 初入選
- 一九五九年 会友推挙
- 一九六二年 会員推挙
- 一九七五年 会員努力賞受賞
- 一九九〇年 文部大臣賞受賞
- 一九九九年 理事就任
- 二〇〇五年 常務理事就任



会員 倉澤 實
平成二十三年十二月二十二日没 76歳
ご遺族 倉澤 千代子(妻)

倉澤 實氏略歴

- 一九三四年 栃木県生
- 一九五九年 初入選
- 一九六一年 会友推挙
- 一九六五年 会員推挙
- 一九七二年 会員努力賞受賞
- 一九八八年 文部大臣賞受賞
- 二〇〇五年 理事就任
- 二〇〇七年 常務理事就任

「あれこそが彫刻家だぞ。何の欲も打算も無い。」「全てが倉澤さんの好きな形で出来ている。」「いつも現代でありたい。」「彫刻家倉澤實氏を想う時、私はこれらの言葉を思い出します。二つ目は、勉学の場を他大へ遷した私に、氏の学生時代をご存じの彫刻家堀川恭氏が語られたものです。子供の様に、実に楽しそうに、自由自在に形を生み出し続けられた氏は、豊富な話題で会話も楽しい方でしたが、本質的で無い事を口にする」と、「量は質に勝れない。」といった様に、常に鋭い指摘をされました。氏は何時も明快でした。二つ目は大学の同僚で今は故人となられた美学者猿田量氏が、倉澤氏の

報 討

会友 熊谷 邦子氏



会友 熊谷 邦子

平成二十三年十一月二十九日没 86歳
ご遺族 菊池 俊

熊谷 邦子氏略歴
一九二六年 北海道生
一九七五年 二科展六十周年
一九七六年 61回二科展
一九七七年 62回二科展
記念賞受賞
パリ賞受賞
会友推挙

熊谷邦子先生を悼む

突然の訃報は昨年十一月二十九日、北海道も本格的に冬に入り寒い日でした。最近では市部展などで年に数回、札幌でお会いする程度でしたが、お元氣な姿を拝見していただけたに信じられない出来事でした。邦子先生との出会いは、三十八年前、熊谷絵画教室で、故善正先生とご夫妻で指導されていた時でした。その時期、教室の活動は室蘭市の文化育成に大きく貢献し、昭和四十九年には故善正先生が第一回室蘭市文化賞を受賞されました。また、邦子先生が二科展

で六十周年記念賞、六十一回展パリ賞、六十二展会友推挙と駆け上がり、若い私達に大きな刺激与えに科展出品の礎になりました。

二科展で拝見したパリ賞「白い風」は裸婦を背景に多くの白い鳥が舞う構成繊細なタッチ今も忘れません。昭和六十二年に善正先生が他界され、おしどり画家と人も羨む仲だった邦子先生は一生懸命に虚脱を乗り越えて制作にとりかかっていました。

平成十四年に室蘭市より故善正、邦子両先生の二人展の依頼があり、市美術館で開催、市民の大きな反響がありました。今日、両先生が丁寧に播かれた一粒一粒の種が育ち道内外で活躍する多く作家を搬出していきます。

北海道支部に於いても邦子先生は献身的に後輩の指導に努めておられました。パリ賞の白い鳥のように飛び立った邦子先生…心からご冥福をお祈りいたします。
柴崎 康男

報 討

会友 杉浦 嘉子氏



会友 杉浦 嘉子

平成二十四年一月十三日没 84歳
ご遺族 杉浦 正美(夫)

杉浦 嘉子氏略歴
一九五三年 二科展初入選
一九八二年 二科展特選
一九八五年 会友推挙
一九九四年 会友賞

杉浦嘉子先生を悼む

一月十四日の夕刻、ご主人からの悲しいお知らせが間違いいではないかと、通夜の席まではどうしても信じられませんでした。嘉子先生と二科との出会いは職場の絵画教室の講師安藤幹衛先生でした。その後、北川民次先生主宰のエルドラド絵画研究所でも厳しいご指導をお受けになりました。今でこそ出品者の半数以上が女性ですが、初入選当時は中部地方の紅一点。旧姓「犬飼」に因んで絵画や彫刻の先生方から「ワンちゃん」という愛称でたいへん

可愛がられ、そういう事が絵を描く喜びに繋がったとお聞きしています。子育ての間も出品を続けられ、制作活動と家庭生活を両立された半世紀以上の足跡は、後に続く女性たちの道標となりました。

お若い頃から赤いハイヒールがお好きで、実によくお似合いました。最後にお会いした一月四日も赤い靴を履いておられました。永い歳月後輩たちのことをお心にかけて頂きまことに有り難うございました。どうか、安らかにお休みください。
合掌 渡辺 倭文子

お知らせ

支部展・個展・グループ展の案内、告知を公益社団法人二科会HPに掲載ご希望の方は、DM(案内状)などに、<HP掲載希望>と明記して、二科会事務所宛に郵送・FAX又は(nika@nika.or.jp)メールにてお知らせ下さい。

展覧会日程表

8月	23日(木) 搬入(業者・個人)	11日(火) 休館日
	24日(金) 搬入(個人)午後四時まで	14日(金) ミニコンサート(高江洲ハープ)18時
	25日(土) 審査(絵画・彫刻)	15日(土) 二科展ガイドツアー 19時まで 敬老の日
	26日(日) 審査(絵画)	17日(月) 展覧会最終日 二時まで 敬老の日
	27日(月) 審査(絵画)	18日(火) 搬出(絵画・彫刻)
	28日(火) 審査(最終賞審査)	19日(水) 搬出(絵画)
	29日(水) 審査(大臣賞審査)	
	30日(木) 選別 (絵画・彫刻)・入選通知	
	31日(金) 業者選外作品搬出	
9月	1日(土) 業者選外作品搬出	
	3日(月) 個人選外作品搬出	
	4日(火) 個人選外作品搬出 展示日	
	5日(水) テープカット10時 ギャラリートーク	
	6日(木) 理事会(13時)	
	7日(金) 夜間開館(20時まで)	
	8日(土) ギャラリートーク 「写真」10時半、13時半(予定) / デザイン部授賞式	
	9日(日) ギャラリートーク 「写真」10時半、13時半(予定) ギャラリートーク 「絵画・彫刻・デザイン」10時	
		◆名古屋展 愛知県美術館ギャラリー 平成24年10月2日(火) 10月14日(日)
		◆大阪展 大阪市立美術館 平成24年10月30日(火) 11月11日(日)
		◆京都展 京都市立美術館 平成24年11月27日(土) 12月8日(土)
		◆広島展 広島県立美術館 平成25年1月7日(月) 1月13日(日)
		◆鹿児島展 鹿児島県歴史資料センター 黎明館 平成25年3月6日(水) 3月17日(日)

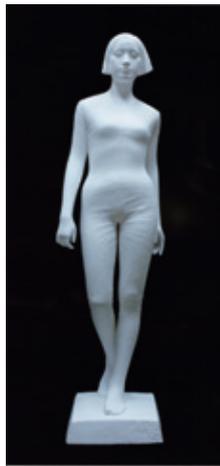
東京都美術館がリニューアルオープンを期して「公募団体ベストセレクション展」を開催

公募展発祥の地として歴史ある東京都美術館が「公募団体ベストセレクション美術」展をスタートしました。全国の主要な美術公募団体の中から27団体による合同展で各団体が相互に刺激しあい、競い合うことにより公募展全体の活性化に寄与することを目指した企画で、各公募団体から選出された「団体の顔」とも言うべき句の作家171名による競演となりました。

出品作家の人選については、団体側で若手から中堅・ベテランまでとバランスよく団体の「一押し作家」を選んではしいとの主催者からの要望があり、二科会では絵画

朗報！彫刻部吉野毅理事が日本芸術院賞を受賞

日本芸術院（院長・三浦朱門）は3月16日、平成23年度の芸術院賞授賞者を発表。芸術分野で優れた功績を挙げた8名に平成23年度（第68回）の日本芸術院賞を贈ることが発表されました。そのうち美術関連分野の彫刻で吉野理事が受賞しました。授賞対象作品は



夏の終わり '11

部から中原史雄、西健吉、中島敏明、山中宣明、茶谷弥広、山下かじん。彫刻部からは菅原二郎、竹屋修、嶋崎達哉の9名を選出しました。各団体の代表作家による展示だけに大変に見応えのある充実した展覧会でした。主催者側は少なくとも5年（5回）は続けたいとの意向があり、かつて戦後の復興期に新聞社の主催で「連合美術団体展」が開催された歴史はありますが、近年はそうした動きもなく、この展覧会はある意味では美術史に残る試みとなるものと思われま

生方純一

支援活動を継続実施

被災地復興支援活動計画

本年度も東日本大震災で被災した地域への支援活動を継続して行います。96回展では、南相馬市における義援活動を実施し、会場に子供たちの作品を展示し、観覧者の大いなる反響を得ました。

本年度も支援活動について6月12日、被災地支援担当理事川内、登坂、吉井、中島の協議により、昨年同様の〈絵画教室〉と、いまだに仮設住宅や、避難所生活を余儀なくされている方々への〈絆通信援助〉の2件の実施を決定しました。被災地児童絵画教室は、今だ地震、津波被害に加え福島原子力発電所の汚染による深刻な事態に怯えながらも、頑張つて通学している子供たちを、絵画制作を通して励まそうと、南相馬市教育委員会学校教育課と、打ち合わせをしています。

一方の絆通信は、原発被害で故郷を去ることを余儀なくされて、今尚帰郷のあてがない双葉町民、村ごと避難の状況の飯館村の方々、会員の絵葉書20枚、東北3県の記念切手1シートを義援セットとし、各世帯

にお届け、家族、親戚、友人の絆通信に利用していただけにと、計画しました。

97回展覧会絵葉書につきましては、会員の皆様のご理解ご協力をお願いする次第です。

川内悟

短信

上野の森美術館賞展 大賞受賞

第30回上野の森美術館大賞展で、会友・佐藤英行氏の震災の風景を大胆に構成した「地鳴り」S100号の作品が大賞を受賞した。さらに入選は、寺園和義、山下かじん、井上貴義氏等。

一昨年の大賞受賞根本悟氏に続く快挙に、二科展を発表の場とする作家の意欲的な制作と成果を期待したい。

■巡回展・福岡県立美術館 2012年7月24日（火）～7月28日（日）

くひたむきの画業60年～古賀耕児遺作展

2012年6月26日（火）～7月1日（日）

■福岡美術館 特別展示室B 古賀耕児氏、没後3年の遺作展開催。

事務局便り

第34回定時会員総会において、役員改選により選出されていた新役員が選任され、これに伴い事務局も新メンバーになりました。公益社団法人二科会移行登記にご尽力され、新たな礎を築かれた山中前事務局長は改めて感謝いたします。後任事務局長として、微力ではございますが、頼もしい安田会員、新しく加わって頂く平会員、そして原田・飯澤事務局スタッフが丸となって、担当理事・委員会の先生方がよりよく活躍できる環境作りにかけて参る所存です。

これまで蓄積してきたデータベースを活かして、事務処理のスリム化を計り、ホットでフットワークのよい事務局を目指していくつもりでおります。

現在、第97回二科展に向けて、各担当の先生方が活動されていらっしゃいます。展覧会が成功するよう、皆様のお力添え宜しくお願いいたします。 埜 珠世

newsrika@gmail.com
二科ニュース専用
WEB投稿用メールボックスを設置いたしました。

編集後記

2年ぶりに開催された春季二科展をお伝えする春号から、新メンバーの二科ニュース編集委員は始動しました。上野公園も洒落たカフェなどが景観にマッチするよう建てられ、どこか懐かしいにおいのある上野界隈も今風に様変わりしています。街も変わる、人も替わる、会も又、新たな時を進みつつあります。公益社団法人二科会としての総会で、新理事、役員が選出されてまもなく、会にとつて大きな精神的支柱であった織田廣喜名管理理事長の訃報がはいり、発行が予定より遅れましたことをお詫び申し上げます。(N)



カット 五味 祥子

編集委員

- 委員長 (絵) 野村 みそら
- 委員 (絵) 本間 千恵子
- 〃 〃 〃 深見 まさ子
- 〃 (彫) 金澤 英亮
- 〃 〃 〃 宮澤 光造

平成二十四年七月三日発行
公益社団法人 二科会
〒160-0022
東京都新宿区新宿4-13-15
レイフラット新宿501号室
電話 03(3354)6646
FAX 03(3354)4768